

韻律の変化を用いた アパブランシャ語文献の年代区分

山 畑 倫 志

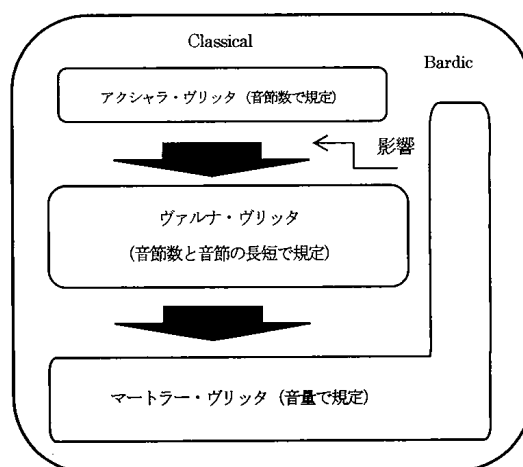
1. はじめに

10～14 世紀の韻律文献にはアパブランシャ語 (Ap) の韻律の記述が豊富に見られるが不一致な点も多い。しかしその不一致は韻律の使用実態の多様性を示しているとも考えられる。一方、現存する Ap の文献には言語特徴の点で様々な変異を含み、文献間の関係の整理は困難である。そこで本稿では Ap 文献整理基準の一つとして韻律の相違の利用を検討する。特に実際に多用されたラッダー律 (Raḍḍā), パッダディカー律 (Paddhaḍikā), ラーサカ律 (Rāsaka) の 3 つを取り上げその推移を確認する。さらに Ap のジャイナ教説話の主要韻律であったパッダディカー律の構造が実際の作品の中でどう変化していったのかを追う。

2. 主たる韻律の移り変わり

Ap の韻律に言及する韻律書の多くを校訂したヴェーランカルはインド語の韻律は右図のように変化したとしている¹⁾。すなわち本来音節数で韻律としての形式を制御していた (ヴァルナ・ヴリッタ) が、主に音楽の演奏とともに歌われることにより、音節の時間的な長さ (音量, kāla, mātra) による制御が部分的に導入され (ヴァルナ・ヴリッタ), その後より時間的な長さが支配的になる (マートル・ヴリッタ) という流れを想定している。Ap の韻律の変化はこのマートル・ヴリッタ内部の発展とみなしうる。次項で Ap に言及する各韻律書の記述を確認し、表 1 にまとめる。

図 1 主たる韻律の変遷



(252) 韻律の変化を用いたアパブランシャ語文献の年代区分 (山 畑)

3. 主要な韻律と韻律書の記述——時期と内容に基づき3群に分類する

A 群『ジャーナーシュライー (*Jānāśrayī*: Jn.)』6～7 世紀,『ヴリッタジャーティサムッチャヤ (*Vṛttajāṭisamuccaya*: Vjs.)』7 世紀以降／B 群『スヴァヤンブーチャンダス (*Svayambhūchandasa*: Sb.)』8～9 世紀,『チャンダハシェーカラ (*Chandaḥśekhara*: R.)』11 世紀,『チャンドーヌシャーサナ (*Chanda'nuśāsana*: H.)』12 世紀前半,『カヴィダルパナ (*Kavidarpaṇa*: Kd.)』13 世紀／C 群『チャンダハコーシャ (*Chandaḥkośa*: Ck.)』14 世紀後半,『プラークリタパインガラ (*Prākṛtapaimgala*: Pp.)』14 世紀後半
ラッター律, ヴァストゥ律: 5 句律+ドーハー律が基本形

Vjs 4.31²⁾ これらの (5 句構成の)³⁾ マートラー律の最後にドヴィパタ律⁴⁾ がくる場合, その韻律はラッター律という名称で示される, と詩人たちは韻律について述べている. /Sb. 4.11⁵⁾ 全ての韻律形式と混合している場合, それをバフルーパ律と呼ぶ. もしそのドヴィパタカ律がその最後にあり, 9 つの句ができた場合, それをヴァストゥ律やラッター律と呼ぶ. /R.5.15⁶⁾ これら全ての形式と混合されうる韻律をバフルーパ律と呼ぶ. その後にドーハカ律がきた場合, ラッター律あるいはヴァストゥ律となり, 9 つの句をもつ韻律ができる. /H. 5.23⁷⁾ それらの (5 つの句の) うち 3 番目が 5 番目と韻を踏み, その後にドーハカ律などが加わればヴァストゥ律やラッター律となる. /Kd. 2.35⁸⁾ ヴァストゥ律とドーハー律あるいはドーハー律とヴァストゥヴァダナ律, ドヴィパディー律とギーティ律 (の組み合わせ) はドヴィバンギーとなる. ドーハー律とマートラー律の組み合わせもヴァストゥ律と呼ぶ. /Ck. 34⁹⁾ 最初の句は 15 マートラ, 3 番目と 5 番目も同様に. 2 番目と 4 番目は 11 マートラとされる. 全部で 67 マートラとなった韻律をラーダカと呼ぶ. /Pp. 1.133¹⁰⁾ 最初の句は 15 マートラで終わり, 2 番目は 12 マートラ, 3 番目は 15 マートラ, 4 番目は 11 マートラ, 5 番目は 15 マートラと知れ. 全部で 68 マートラとなり, その後にドーハー律をつなげよ. それでラージャセーナ律の完成であり, それはラッター律とも呼ばれる.
パッダディカー律 (などの 16 マートラ型韻律): 各句が 16 マートラの韻律. 規定上は 4 句 (*catuspadī*) であるが, 実際には 2 句が主.

Sb. 6.129¹¹⁾ 16 マートラならばパーダークラカ律, 6・4・6 マートラならばサンクラカ律, 4 マートラ (のガナ) が 4 つであればパッダディカー律であると知れ. /Sb. 8.15¹²⁾ パッダディカー律を作る場合, 各句に 16 マートラ含ませる. 2 句ごとに韻を踏ませ, カダヴァカは 8 つの韻のペアで作られる. /R. 5.173¹³⁾ 4 マー

トラのガナが4つであればパッダディカー律である。／H. 3.73¹⁴⁾ 4 マートラのガナを4つ、奇数句では v-vv-vvvvvv が許されず、末尾で韻を踏むのがパッダティ律である。4 マートラのガナを4つ、句末で韻を踏めばパッダティ律である。パッダディカー律はまた別である。その規則では奇数句には ja ガナ (v-v) を置けず、句末には ja ガナと4短音節がくる。／H. 6.31¹⁵⁾ 4 マートラのガナを4つで一つの句を作るとパッダディカー律である。／Kd 2.22¹⁶⁾ 4 マートラ (のガナ) 4つでパッダディカー律である。句末のガナは中央に2 マートラ (v-v もしくは vvvv), 奇数句に ja ガナはこない。4+4+5 だとカンダ律, 5+5+5+5 だとマダナーヴァターラ律である。／Ck. 36¹⁷⁾ 16 マートラの句を4つ配置し、句末に ja ガナを置く。全部で64 マートラを数える。それをパッダディカー律と理解しなさい。／Pp. 1.125¹⁸⁾ 4 マートラのガナを4つ置き、各句末には ja ガナ¹⁹⁾ を置く。4つの句が同じマートラ数のものがパッダディカー律であり、全部で64 マートラになる。(それを聞けば) 月から光がほとばしる (pajjharai)。

ラーサカ律

(A) 古ラーサカ律: Jn. 5.69-72²⁰⁾ 23 マートラだとバングララーサカ律である。句末は長音節とする。長音節を句末に有する23 マートラの韻律はバングララーサカと名付けられる。12 マートラだとアヴァランバナ律である。各句末のほとんどが長音節である。二つ合わさるとラーサカ律である。バングララーサカ律とアヴァランバナ律の二つがあればラーサカと呼ばれる。(B) 21 マートラのラーサカ律: Sb. 8.25²¹⁾ 21 マートラの配置が自由だが、14 マートラでガナを切り、休止とする。これが完全でより美しいラーサー・バンダである。短音節3つで終わるとより甘美である。H. 5.3²²⁾ 18 マートラと na ガナ (vvv) で14 マートラに休止があればラーサカという。(C) 23 マートラのラーサカ律: H. 5.4²³⁾ 4 マートラが5つに短長。／Kd. 2.23²⁴⁾ 5 マートラが2つ、4 マートラが2つ、3 マートラが1つでガリタカ律。3 マートラが2つ、4 マートラが3つ、3 マートラが1つ、長音節一つでカンジャカ律。4 マートラが5つに短長でラーサカ律となる。

以上をまとめた表1を見るとB群の末期であるH周辺で大きな変化が現れている。主に音量で制御するマートラー・ヴリッタに再び以前の短長音節のガナによる制御が導入されている。その原因としてはAp文学が文章語として確立していく際にサンスクリット語文学の影響が強く出た可能性などが考えられる。

(254) 韻律の変化を用いたアパブランシャ語文献の年代区分 (山 畑)

4. 各テキストとの照合

本稿では以下の5作品のパッドディカー律を含む16マートルの韻律の句末ガナを調査した。ヴィクラモールヴァシーヤ (*Vikramorvaśīya*) の Ap 部分²⁵⁾ 5世紀 / パウマチャリウ (*Paumacariu*) 8~9世紀 / サラハ (*Saraha*) のドーハーコーシャ (*Dohākoṣa*) 10~11世紀 / ベンガル / タントラサーラ (*Tantrasāra*) 10世紀 / カシミール / ハリセーナチャリウ (*Hariseṇacariu*) 13世紀ごろ。調査結果は表2で示す。

そこから次の2点が推測できる。まず、スヴァヤンブーを契機に ja ガナが16マートル韻律の主要句末ガナとされたこと。そしてカシミールやベンガルといったインド西部から離れた地域では、それが広まらなかったということの2点である。

-
- 1) *Jayadāman* (1949) Intro., *Chando'nuśāsana* (1961) Intro. 2) eahu mattahu antimau / javvihi duvahau bhodi / to tahu nāmem raḍḍa phuḍu / chandai kaiaṇu bhrodi // Vjs. 4.31 etāsām mātrānām antimo / yadā dvipatho bhavati / tadā taṃ nāmnā raḍḍam sphuṭam / chandasi kavijano vrūte //
- 3) 直前まで5句 (pañcapadī) のマートルー律を説明。 4) 韻律は 14, 12, 14, 12. ドーハーと類似だが奇数句は 4+4+4+-, 偶数句は 4+4+ - の制限有り。 5) jāvi missā savvarūehim / sā bhaṇṇai baturūā / antaammi jai tīe duvahao / sapasid-dhā ṇavacalaṇā / ehu vatthu va raḍḍo vi jāṇai // Sb 4.11 yāpi miśrā sarvarūpaiḥ / sā bhaṇyate baturūpā / ante yadi tasyāḥ dvipathakaḥ / suprasiddhā ṇavacaraṇā / eṣā vastuḥ raḍḍāpi jñāyate //
- 6) yā vimīśraiḥ sarvarūpaiḥ syāt / sā bhaṇyate baturūpā / bhaved āsām dohako 'nte tu / raḍḍeṣā vastv athavā / bhavati prasiddhanavacaraṇā // R 5. 15. 7) āsām tṛtīyasya pañcamenānuprāse 'nte dohakādi ced vastu raḍḍā vā // H. 5. 23 āsām mātrādinām tṛtīyapādasya pañcamena pādenānte 'nuprāse 'nte dohakāpadohakāvadohakāś cet tadā raḍḍā vastu vā / yathā / luḍhidu caṇḍa-ṇavillipallamki, saṃmilidu lavaṃgavaṇi, khalidu vatthuramaṇīyakayaliḥim / ucchalidu pha-ṇilayahim, ghulidu saralakakkolalavaliḥim // cuṃvidu māhavivallariḥim, pulaidakāmisaṛiru / bhmarasariḥchau saṃcarai, raḍḍau malayasamīru //
- 8) vatthu ya dohā doha ya vatthuvaya-ṇa taha ya duvaigīo / huṃti duhaṃgī nāmā vatthū dohāijuyamattā // Kd 2.35 vastu ca dohā; dohā ca vastuvadanam; tathā ca dvipadīgityau / bhavanti dvibhaṅgī nāma; vastu dohādiyutamātrā.
- 9) tihiḥim mattau paḍhamu pau hoi / taha tiyau paṃcamau / bīya cautthu ruddaya niruttau / sataṣṭhi vi matta niru / sukavi alhi rāḍhau su uttau / Ck. 34. 10) paḍhama viramai matta daha paṃca, paa bīa bāraha ṭhavahu, tīa thāim dahapaṃca jāṇahu / cārima eggārahahim / paṃcame hi daha paṃca jāṇahu / aṭṭhā saṭṭhi pūravahu, agge dohā dehu / rāaseṇa suprasiddha ia raḍḍa bhaṇijjai ehu // Pp. 1.133. 11) solahamattam pāūlaam / chacachaṃsaviraiaṃ saṃkulaam / tam cea cattāracaukkalaam / tam jāṇasu paddhadiādhuvaam // Sb 6.129. 12) paddhadiā punu je i kareṃti / te soḍaha mattau pau dhareṃti / bihiṃ paahim jamau te ṇimmaamti / kaḍavaa aṭṭhahim jamaahim raanti // Sb 8.15. 13) cagaṇacatuṣke sati paddhadikā / R. 5.173. 14) cīr nauje jo jo līr vānte 'nuprāse paddhatiḥ / H 3.73 cagaṇacatuṣṭayam pādānte 'nuprāse sati

表 1 韻律書の記述の推移

		韻律名				
		ラッター律	パッドディカー律	古ラーサカ	ラーサカ律 21 マートル型	23 マートル型
韻律書の記述	A 群	Jn	なし	なし	23×2+12×2	なし
		Vjs	マートル律+ ドヴィパタ律	なし	なし	なし
	B 群	Sb	バフルーパ律+ ドヴィパタカ律	4 マートル×4	なし	18+--, 14 で休止
		R	バフルーパ律+ ドーハカ律	4 マートル×4	なし	なし
		H	マートル律+ ドーハー律	4 マートル×4, 奇数句 ja ガナ禁, 句末は v-v もしくは--	なし	18+--, 14 で休止
	B/C 群	Kd	マートル律+ ドーハー律	4 マートル×4, 奇数句 ja ガナ禁, 句末は v-v もしくは--	なし	4×5+v-, 14 で休止
		Ck	15+11+15+11+15 13+11+13+11	4 マートル×4, 句末は v-v もしくは--	なし	なし
	C 群	Pp	15+12+15+11+15 13+11+13+11	4 マートル×4, 句末は v-v もしくは--	なし	なし

表 2 各作品の 16 マートル韻律の句末ガナの出現率

タイトル	時期	主要句末ガナ			
		v-v	v-v-v	-v-v	--
ヴィクラモールヴァシーヤ	5 世紀	0	11.5	50	7.7
ドーハーコーシャ	10 世紀	6.4	4.5	44.9	32.1
タントラサーラ	10~11 世紀	28.6	7.1	50.1	7.1
パウマチャリウ	8~9 世紀	32.4	11	41.1	6.3
ハリセーナチャリウ	13 世紀以降?	42.1	11.9	1.9	0.8

paddhatiḥ / paddhatīkety anye / asyāpavādaḥ / nātra viṣame jaganāḥ pādānte ca jagaṇo laghu catuṣṭayam vā / 15) ciḥ paddhaḍikā / H. 6.31 cagaṇacatuṣkaṁ paddhaḍikā / 16) paddhaḍiyā ṭacaukkaṁ carame ṭe majjhakā, na viṣame jo / ṭadugaṁ tagaṇo khaṇḍaṁ, cau tā mayānāvayāru tti // Kd 2.22. 17) paya cāri ṭhavijjahi sasihi matta / pāūharu gaṇu hoi aṁta / causatṭhi kalai savvai gaṇehu / paddhaḍiya chaṁda taṁ vuha muṇehu // Ck. 36. 18) caumatta karaha gaṇacāri ṭhāim, ṭhavi aṁta paohara pāim pāim / causatṭhi matta pajjharai imdu, sama cāri pāa pajjhaḍia chaṁdu // Pp. 1.125. 19) paohara とは ja ガナのこと Pp. 1.17. 20) trayoviṁṣatir bhaṅgurāsakam / Jn. 5.69 bhāntā iti tu vartate / gurvantās trayoviṁṣal laghavo ya-theṣṭaṁ miśritā bhavati cet bhaṅgurāsakam nāma bhavati // dvādaśāvalambanam / Jn. 5.70 tasyāḥ pratipādamante prāyo bhakāro bhavati // sonte / Jn. 5.71 ubhe rāsakam / Jn 5.72 ubhe bhaṅgurāsakāvalambane sahite rāsakam ity ucyate / 21) ekkaviśamattāṇiḥaṇau uddāmagiru / caudasāi vissāma hobhai gaṇaviraithiru / rāsābaṁdhu samiddhu eu ahirāmaaru / lahuatīalaava-sānavirai aimahuraaru // Sb. 8.25. 22) dāmātrā no rāsako ḍhaiḥ / 5.3 surarasaṇiṇakayavahu

(256) 韻律の変化を用いたアパブランシャ語文献の年代区分 (山 畑)

viharāsayaśunia, joiviṃḍaviṃḍārayasayaamuniacaria / sirisiddhatthanaresarakulacūlārayaṇa, jayahi
 jīṇesara vīra sayarabhuvāṇābharāṇa // H. 5.3. 23) culgā vā // H.5.4. 24) tadugaṃ
 ṭadugaṃ cagaṇo galiyayam aha cadugaṭatigacagaṇagurū / khaṃjayamaha ṭagaṇapaṃcagalahugurū
 rāsayaṃ hoī // Kd. 2.23. 25) Ap 部分を含めた第四幕は後代の加筆も疑われている。
 Velankar (1961), pp. 33–37, Kale, pp.376–377.

〈参考文献〉

- De Clerck, Eva. *Een Kritische studie van Svayambhūdeva's Paṇḍitaru*. Gent: Universiteit Gent, 2005.
- Jain, Snehlata. *Hariseṇacariu*. Jaipur: Apabhraṃśa Sahitya Academy, 2006.
- Kale, M. R. *The Vikramorvaśīya of Kālidāsa*. New Delhi: Motilal Banarsidass, 1967.
- Miśra, Paramahansa. *Tantrasāraḥ: Nira-kṣīra-viveka hindī bhāṣya saṃvalita*. Vārāṇasī: Chaukhambha Vidya Bhavan, 1985.
- Shahidullah, Mohammed. *Les chant mystiques de Kāṇha et de Saraha*. Paris: Adrien-Maisonneuve, 1928.
- Velankar, Hari Damodar. "Vṛttajātisamuccaya of Virahāṅka." *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society (New Series)*, vol. 8 (1932), pp. 1–28.
- . "Apabhraṃśa Metres." *Journal of the University of Bombay (Arts and Law)*, vol. 2, part 3 (1933), pp. 32–62.
- . "Prākṛta and Apabhraṃśa Metres." *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 23 (1947), pp. 1–12.
- . *Jayadāman*. Bombay: Haritosha Samiti, 1949.
- . *The Vikramorvaśīya of Kālidāsa*. New Delhi: Sahitya Akademi, 1961.
- . *Chando'nuśāsana*. Bombay: Bharatiya Vidya Bhavan, 1961.
- . *Kavidarpaṇa*. Jodhpur: Rajasthan Oriental Research Institute, 1962.
- . *Svayambhūchanda*. Jodhpur: Rajasthan Oriental Research Institute, 1962.
- Vyas, Bhola Shanker. *Prākṛta-Paiṅgalam*. Ahmedabad: Prakrit Text Society, 2007.

(平成 25 年度科学研究費補助金研究活動スタート支援 [課題番号: 24820001] による研究成果の一部)

〈キーワード〉 アパブランシャ語, 韻律, 韻律書, raḍḍā, paddhaḍikā, rāsaka

(北海道大学専門研究員, 博士 (文学))